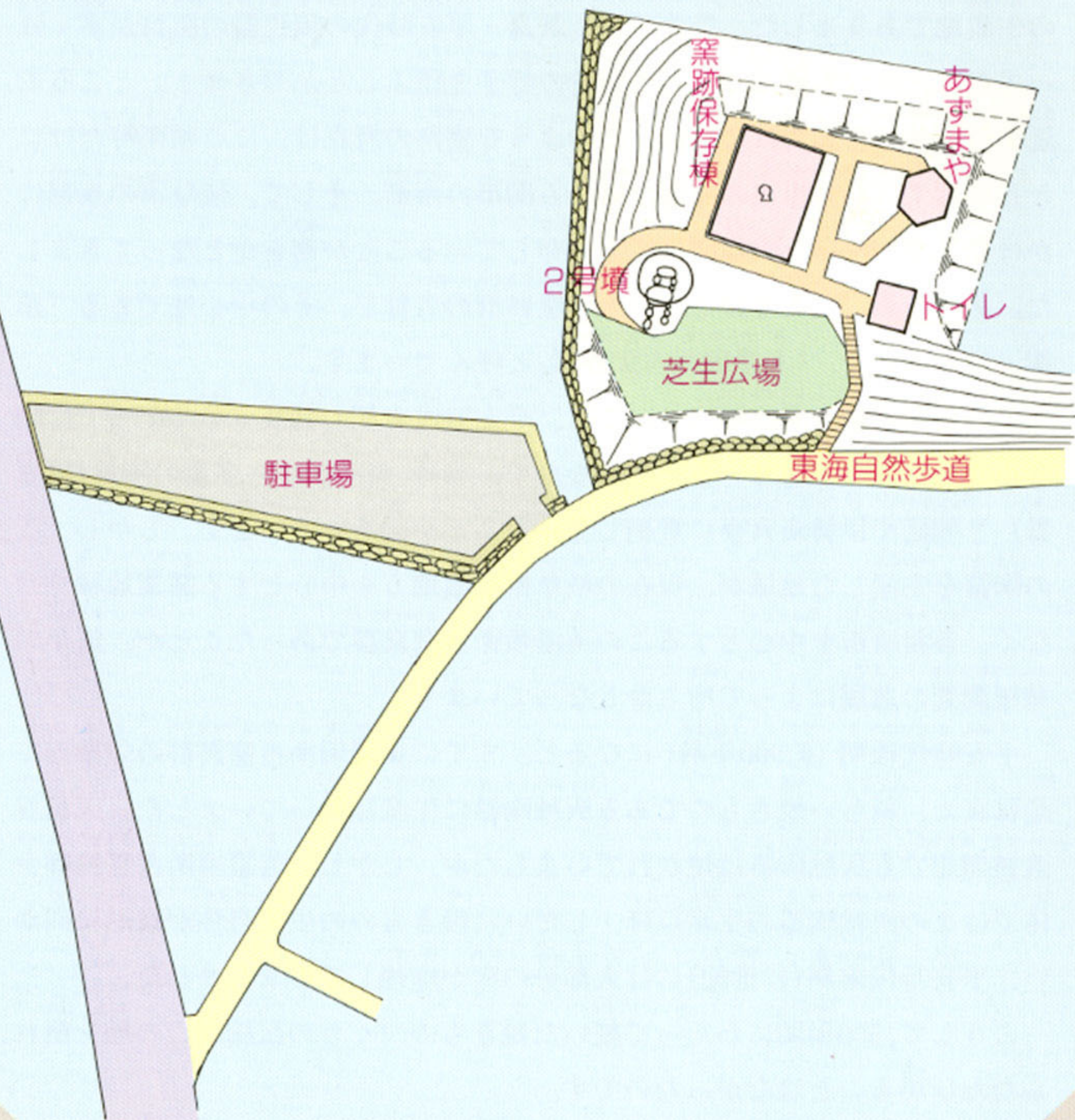


# 施設の概要

**位置** / 各務原市須衛天狗谷2403番地  
**構造** / 古窯跡保存棟(鉄骨造瓦葺平家建)  
           東屋 (擬木製銅板葺)  
           便所 (鉄骨造銅板葺平家建)  
**敷地面積** / 2,045.42㎡(古窯跡等保存施設)  
               1,030.58㎡(駐車場)  
**建物床面積** / 古窯跡保存棟 150㎡  
                   東屋 10.39㎡  
                   便所 12.92㎡  
**総工費** / 127,768千円(施設総合) 89,000千円(整備事業費)  
**工期(事業期間)** / 平成2年度から平成3年度(2ヶ年)  
**開所** / 平成4年4月1日

# 施設の平面図



# 位置図



編集・発行 岐阜県各務原市那加桜町1丁目69  
 各務原市教育委員会文化課  
 TEL (0583) 83-1111  
 平成9年3月 増刷

天狗谷遺跡







### 1号窯跡(左側)

全長5.9m、最大幅1.5m、傾斜角38度。

灰釉陶器を焼成した半地下式穴窯で、分焰柱・障壁が良く残っています。

時期は平安時代後期(11世紀)。

### 2号窯跡(右側)

全長7.7m、最大幅2.2m、高さ1.3m、傾斜角33度。

須恵器を焼成した地下式穴窯で、美濃須衛古窯跡群独特の須恵器窯の構造が良く残っています。

時期は奈良時代中期(8世紀中頃)。

### 窯跡保存棟



1号窯・2号窯を現状保存するために、伝統的な日本建築の良さを取り入れた和風保存棟です。



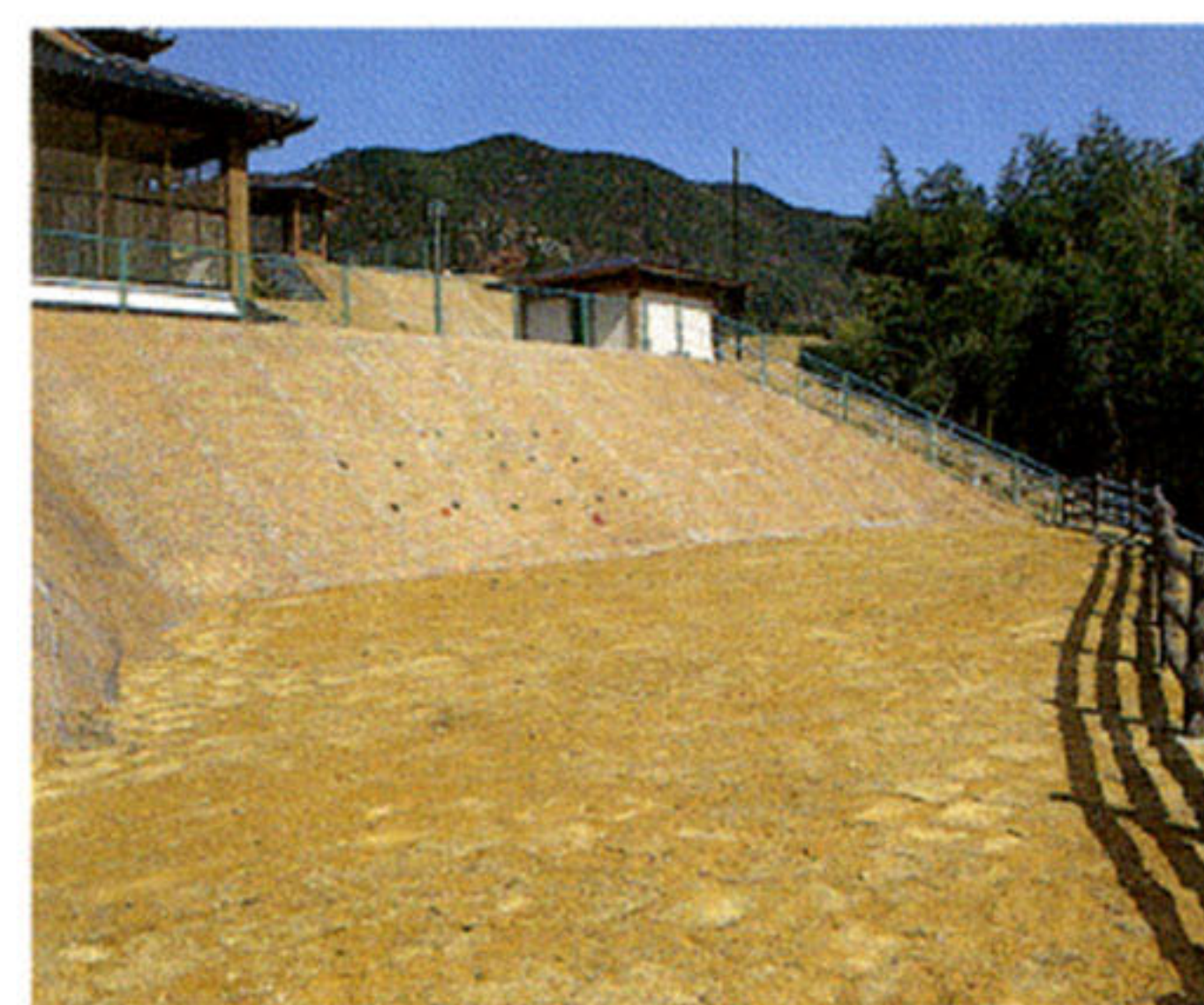
天狗谷遺跡の成り立ちについて、焼きものにちなんで、わかりやすい説明による陶製解説板が設置されています。



▲あずまや



▲便所



▲芝生広場



▲駐車場



### 2号墳

直径約8mの円墳で、石室の全長は6.1m、幅は1.5mです。古墳時代終末の7世紀後半につくられた古墳です。



### 発掘調査中の2号墳

横穴式石室は、大型の山石を用いてつくられています。

## 天狗谷遺跡の歴史的背景

天狗谷遺跡が所在する各務原市須衛町は、『スエ(陶)』の名称が示すとおり、いまから1400年程前の古墳時代から700年程前の鎌倉時代にかけて、焼きもの生産地でありました。なかでも、奈良・平安時代の須恵器の窯跡が多く残っており、かつて盛んであった当時の様子を偲ぶことができます。ところで、近年の遺跡分布調査によれば、このような窯跡の所在は、ここ須衛町だけでなく、各務原市の北部全域から関市の南部、そして、岐阜市の東部にかけて、130か所以上の場所に広く分布していることが明らかとなってきました。そのため、現在ではこの一大古窯跡群の名称を、その中心地である「須衛」にちなんで、『美濃須衛古窯跡群』と呼んでいます。

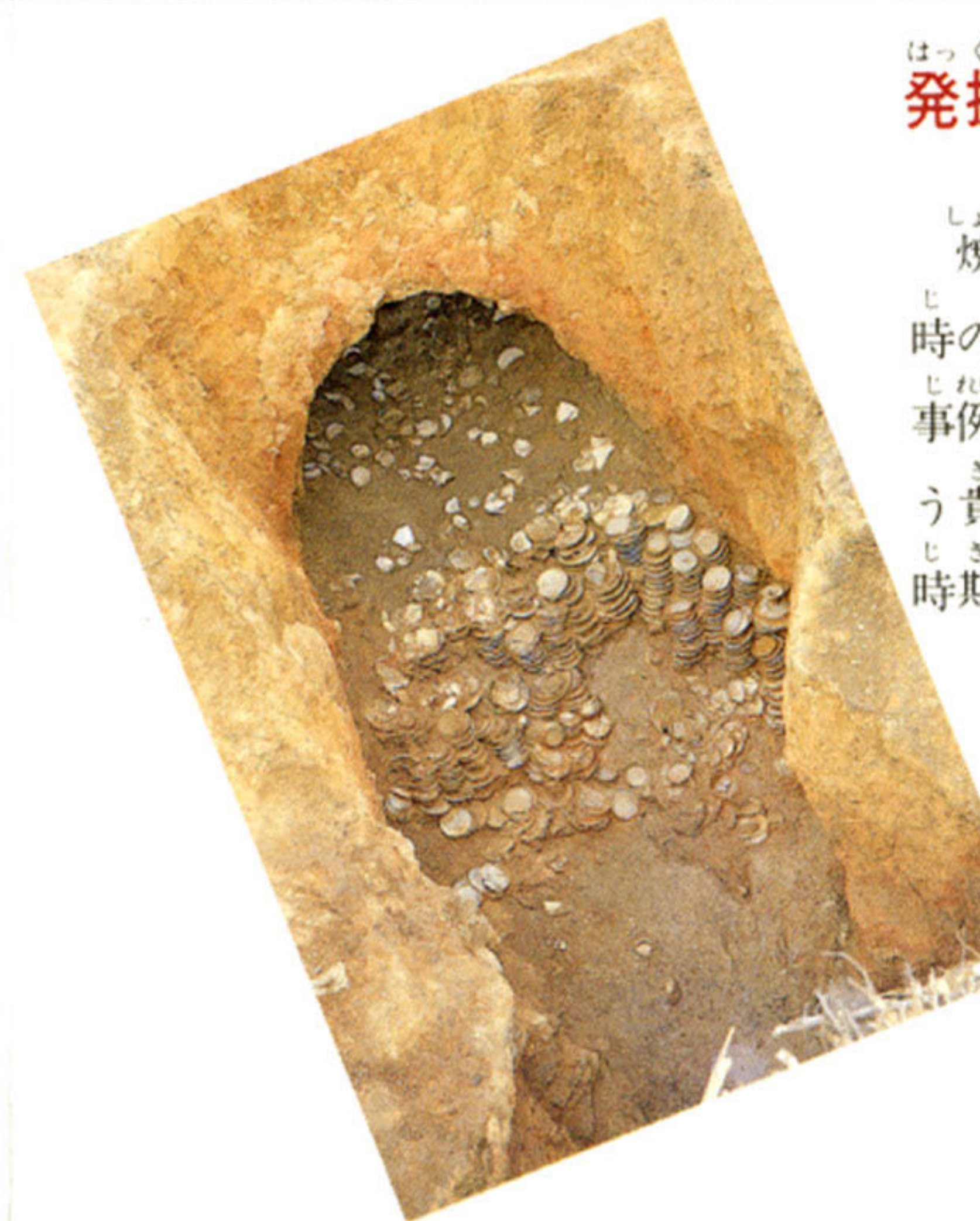
この美濃須衛古窯跡群については、平安時代中期の延長5年(927年)に編さんされた『延喜式』という文書のなかで、当時、美濃国から多量の陶器(須恵器)を朝廷や伊勢齋宮寮に貢納していたことが記されています。しかし、この陶器を生産した地域が、現在の岐阜県東濃地方を中心とする窯業地域ではなく、各務原市を中心とするこの美濃須衛古窯跡群であったことが、近年の発掘調査の進展によって明らかとなっています。

平安時代後期(約900年前)になると、すでに美濃須衛古窯跡群の須恵器生産は衰え、新しい焼きものである灰釉陶器に生産は移っていました。天狗谷遺跡周辺でも灰釉陶器は焼かれていましたが、しかし、美濃須衛古窯跡群全体ではこの灰釉陶器の生産以降、しだいに焼きもの生産自体が衰退に向かい、平安時代末期(12世紀)には大部分の窯が廃絶してしまいました。

こうして、500年間にわたって続いた焼きものづくりの伝統はこの地を離れ、ふたたび戻ることはなかったのです。

## 天狗谷遺跡発掘調査について

昭和59年8月から翌年の昭和60年8月にかけて、須衛天狗谷地区では遺跡の発掘調査が行われました。この結果、須恵器窯跡7基、灰釉陶器窯跡1基、縦穴式住居跡1棟、横穴式古墳2基の所在が明らかとなり、なかでも保存状態が良好で、学術的にも貴重とされる須恵器窯跡(2号窯)と灰釉陶器窯跡(1号窯)、そして横穴式古墳(2号墳)がそれぞれ現地において現状保存されることとなりました。各務原市北部地域の自然と文化財に親しむ拠点施設としての役割もあわせて、平成4年2月までに保存整備、および修景工事を完了し、天狗谷遺跡保存施設として完成しました。



### 発掘調査中の須恵器窯跡(7号窯)

焼成の途中で天井部が落盤したため、当時の須恵器が窯づめのまま出土した希少な事例です。当時の窯業技術の一端をうかがう貴重な資料となります。

時期は奈良時代中期(8世紀中頃)。

